山木兼隆の位牌戻る

国学院大から遺族へ

没後200年 鎌倉末期の製作か

特集 熱視線

八巻家に残る位牌を持つ、兼隆の子孫の八巻同族会初代会長である八巻富雄さんの一人っ子布施京子さん（左）と次女の和美さん＝東京の国学院大メディアセンター

今から840年前の三嶋明神（大社）祭礼の夜、多くの手兵が祭りに出掛けていた隙を突き、伊豆韮山の蛭ケ小島に流罪の身だった源頼朝は源氏再興を願って挙兵し、その手初めの戦で、同所山木の、山木判官平兼隆の館を攻めた。この夜襲で兼隆は亡くなり、一族郎党は伊豆を後にして各地に逃れたとされるが、兼隆が亡くなってからおよそ200年後に作られたという位牌がさきごろ、40余年ぶりに遺族の元に戻った。50年前、国学院大教授だった樋口清之さん（1909～97年）が「兼隆の位牌に間違いない」と鑑定した後、行方知れずとなっていた。

（文、写真　特別編集委員・森野宏尚）

位牌は樋口教授に鑑定を依頼した嫡流で所有者の元指圧師・八巻富雄さん（1982年、71歳で没）＝当時、東京都在住＝の1人娘である布施京子さん（57）＝さいたま市＝、山木判官平兼隆を始祖とする一族が発足した八巻同族会（八巻剛正会長）が国学院大に対し「樋口元教授に預けたままになっており、大学にあるはず」と探索を要請。樋口教授は97年に亡くなり、行方が分からなくなっていた。

大学側で探したところ、渋谷区の国学院大を訪ねた。位牌を樋口教授に寄託したのは鑑定から9年後、八巻富雄さんが亡くなる1年前の1981（昭和56）年で、41年ぶんとの連絡が入り、布施さん（24）、八巻同族会6代目会長の八巻剛正さん（81）＝埼玉県熊谷市＝、山木兼隆研究会代表の八巻正和さん（73）＝秦野市＝らが引き取りに東京都さきごろ「見つかった」大教授だった樋口清之さん（1909～97年）が「兼隆の位牌に間違いない」と鑑定した後、行方知れずとなっていた。

（文、写真　特別編集委員・森野宏尚）

位牌は樋口教授に鑑定を依頼した嫡流で所有者の元指圧師・八巻富雄さん（1982年、71歳で没）＝当時、東京都在住＝の1人娘である布施京子さん（57）＝さいたま市＝、山木判官平兼隆を始祖とする一族が発足した八巻同族会（八巻剛正会長）が国学院大に対し「樋口元教授に預けたままになっており、大学にあるはず」と探索を要請。樋口教授は97年に亡くなり、行方が分からなくなっていた。

大学側で探したところ、渋谷区の国学院大を訪ねた。位牌を樋口教授に寄託したのは鑑定から9年後、八巻富雄さんが亡くなる1年前の1981（昭和56）年で、41年ぶんとの連絡が入り、布施さん（24）、八巻同族会6代目会長の八巻剛正さん（81）＝埼玉県熊谷市＝、山木兼隆研究会代表の八巻正和さん（73）＝秦野市＝らが引き取りに東京都

故樋口教授が本物と鑑定

八巻同族会 発足50周年を前に

作製した時代に作られたとみられる漆塗りの位牌の表側。江戸時代以前の故人の戒名が記される。

兼隆の位牌の所有者、八巻富雄さんの生家は山梨県須玉町穴平（現北杜市）。「古里の家に古い位牌があり、そこに伊豆の何とかと、平の何とかとんの『埋もれた古城』などを探し出し、山木判官が北条氏と並ぶ東国の平氏の名門であることが分かり、何となく血の騒ぐ思いがした」（同）。

八巻さんの寄稿や、八巻同族会3代目会長で元東京経済大教授の八巻俊雄さん（山梨県内の生家の一族だという）「山木兼隆の位牌の所有者、判官のことを調べるため、国学院大の樋口教授が預かった」と話した。

八巻同族会の八巻会長は「兼隆の関係のものは名か「一乗（條）寺殿義主人八巻判官平重郎兼高　違いとみられる。

今から600年ほど前、鎌倉時代末期に作られたとみられる山木判官兼隆の位牌。「一乗（條）寺殿義堂宗心大禅定門」、治承四年八月初七日」と記されるという

「一乗（條）寺殿義堂宗心大禅定門」、治承四年八月初七日」。牌は唯一のもので、ご遺族の元に戻り大変喜ばしい。国学院大の先生方に感謝の言葉を述べた。

位牌は高さ40㌢ほどと通常より大きめの細長いもので、高さ30㌢・幅20㌢ほどの漆塗りの2点。細長いものには戒名か「一乗（條）寺殿義主人八巻判官平重郎兼高」と記されるという。

治承四年八月初七日」。治承は平安時代の年号で、天明四年は江戸時代中期の1784年で、表に当時から数代前の故人の戒名が複数書かれている。

「伊豆國…」の一文は八巻富雄さんの新聞寄稿、八巻俊雄さんの著作「天明四年丑十二月　八巻帳三郎　甲州巨摩郡穴平村」「伊豆國城大嶋」とともに細長い位牌裏に書かれているーとあるが、漆塗りの位牌裏に残り勘違いとみられる。

頼朝挙兵 最初の標的 山木判官と号した兼隆

「伊豆國城大嶋主人八巻判官平重郎兼高」などと読み取れる江戸時代の漆塗りの位牌裏

山木兼隆は伊勢平氏の血筋を引く平家の武将、和泉守などを務めた平信兼の子。京で検非違使をしていたが、父との不和（理由不明）で1179（治承3）年1月、伊豆国山木郷に配流された。

だが検非違使時代の別当・平時忠が伊豆知行国主になり、伊豆目代（代官）に任じられた。兼隆は「山木判官」と称され、伊豆国衙を支配下に置き、伊豆で勢力を広げたが、土着の武士らの反感を買い標的にされた？「平家物語」「曽我物語」によると、伊豆の豪族・北条時政が娘の政子（源頼朝と結婚）と兼隆の縁談を進めたとされるが、これは創作―が近年の通説だ。

80（治承4）年8月17日の山木館の夜襲に頼朝は参加せず、時政の事勢が館を襲ったがなかなか落ちず、頼朝の警護で北条館（守山の麓）に残った加藤景廉らが加勢、兼隆の首を取ったとされる。頼朝は数日後、石橋山の戦いに臨んだが、房総半島へ敗走した。

北条館と山木館は直線距離で3㌔弱。当時の狩野川は今よりも東を流れ、大水のたびに流れを変え湿地も多かった。頼朝が配流されていた本来の蛭ケ小島は（現在地、公園）よりも下流域だったか。

山木館は香山寺辺りにあったようで、同寺の略史によれば兼隆が創建したとされる。境内には八巻同族会が建立した兼隆の供養塔がある。近くの山木皇大神社には兼隆神社が明治初め合祀され、祭られている。